

令和7年度(戦後80年)

習志野市平和市民代表団
長崎派遣報告書

未来へ平和を語り継ぐ 29



習志野市

長崎派遣についての報告は
32ページからご覧ください。

目 次

核兵器廃絶平和都市宣言と習志野市の平和活動推進事業	1
令和7年度習志野市平和市民代表団名簿	2
令和7年度習志野市平和市民代表団活動の記録	3
—事前学習会—	6
—写真で綴る 長崎訪問—	
8月8日	32
8月9日	35
8月10日	38
青少年ピースフォーラム	42
長崎インタビューレポート	48
—長崎派遣を終えて—	
長崎派遣の感想	
団長 岡田千砂子	56
団員 中村泰希	57
団員 沖山隼人	58
団員 大澤 咲	58
団員 徳留大希	59
団員 大塚湧斗	59
団員 相川和来	60
団員 千葉光葵	60
団員 原 花蓮	61
団員 織戸紗代	62
団員 大志民 葵	62
平和な未来をつくるために、私たちはなにができるのか？	63
平和市民代表団による報告会	65
—被爆80周年長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典 資料—	
長崎平和宣言	69
平和への誓い	71
—参考資料—	
習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典	73
習志野市平和市民代表団OB、OGによるスピーチ、詩の朗読文	74
習志野市平和市民代表団OB、OGの活動	78
習志野市平和事業のあゆみ	80

核兵器廃絶平和都市宣言と習志野市の平和活動推進事業

平和は市民の安全な生活の基本であり、市民一人ひとりに支えられて実現するものとの認識に立ち、習志野市は、昭和57年8月5日、県内で初めて「核兵器廃絶平和都市」を宣言しました。

戦後50年の平成7年には、永遠に平和事業が引き継がれるような財産基盤となる平和基金を設置し、広島市・長崎市平和式典への市民派遣事業を開始しました。

また、毎年8月6日と9日の広島・長崎原爆の日には、新習志野公民館並びに秋津公園内「平和の広場」で平和祈念式典及び献花を行い、原爆犠牲者を追悼し、再び地上にその惨禍が繰り返されることのないよう、平和の実現を願っています。

核兵器廃絶平和都市宣言

わたくしたち習志野市民は、文教住宅都市憲章を定め、生存と安全をまちづくりの基本とした。

わたくしたち習志野市民は、我が国が世界唯一の核被爆国として被爆の恐ろしさと、被爆者の苦しみを全世界の人々に訴え続けるとともに、再び地球上に広島、長崎の、あの惨禍が繰り返されることのないよう、恒久平和を強く願うものである。

わたくしたち習志野市民は、非核三原則の完全実施を願い、平和を愛する世界の人々と共に、恒久平和を実現することを決意し、核兵器廃絶平和都市をここに宣言する。

昭和57年8月5日 宣言

◆ 習志野市平和市民代表団 広島市・長崎市平和式典派遣事業について

事業の目的

戦争を知らない若い世代が、広島市・長崎市平和式典への参列や、原爆資料館等被爆関連施設の見学を通じて、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさ、平和の尊さを知り、派遣体験を活かして次世代への継承・平和啓発に貢献してもらうことを目的とする。

団員の選出

中学生	7名
高校生	2名
中学校教諭	1名
習志野市原爆被爆者の会会員	1名
計	11名

中学生・中学校教諭は市立中学校から、高校生は市内高等学校から、各学校長・教育委員会等より推薦を得て決定する。
また、団員の他、市職員が1名同行する。

団員の任務

- ・結団式、事前学習会、報告会等に参加
- ・広島市・長崎市で開催される平和式典へ参列
- ・派遣終了後、感想や記録等をまとめ、報告書を作成
- ・学校、家庭、地域等において自らの経験を伝承
- ・習志野市平和基金募金活動への協力

令和7年度習志野市平和市民代表団名簿

団 長	おか だ 岡 田	ちぎこ 千砂子	(習志野市原爆被爆者の会・会員)
団 員	なか むら 中 村	たい き 泰 希	(習志野市立第五中学校・教諭)
団 員	おき やま 沖 山	はや と 隼 人	(習志野市立第一中学校・第3学年)
団 員	おお さわ 大 澤	さき 咲	(習志野市立第二中学校・第3学年)
団 員	とく とめ 徳 留	だい き 大 希	(習志野市立第三中学校・第3学年)
団 員	おお つか 大 塚	ゆう と 湧 斗	(習志野市立第四中学校・第3学年)
団 員	あい かわ 相 川	わ こ 和 来	(習志野市立第五中学校・第3学年)
団 員	ち ば 千 葉	こう き 光 葵	(習志野市立第六中学校・第3学年)
団 員	はら 原	か れん 花 蓮	(習志野市立第七中学校・第3学年)
団 員	おり と 織 戸	さよ 紗 代	(習志野市立習志野高等学校・第3学年)
団 員	おお したみ 大志民	あおい 葵	(習志野市立習志野高等学校・第2学年)
同行職員	こ やま 小 山	さち こ 幸 子	(協働政策課)

【平和のビジョン前にて】

上段（左から）

岡田団長
徳留団員
千葉団員
大塚団員
沖山団員
中村団員



下段（左から）

織戸団員
大澤団員
原団員
大志民団員
相川団員

令和7年度習志野市平和市民代表団活動の記録



5月29日(木) 結団式及び第1回事前学習会

- 市長、副市長、教育長との歓談
- 派遣事業の概要説明
 - ・派遣に伴う活動等の確認
 - ・学習テーマの決定

7月18日(金) 第2回事前学習会

- 事前学習
 - ・被爆体験講話
 - ・学習テーマの発表
 - ・視聴した証言ビデオのレポート発表
 - ・派遣に向けて抱負や思い等の発表
 - ・千羽鶴作成



7月25日(金) 平和の広場清掃活動及び
第3回事前学習会

- 清掃ボランティアに参加
- 事前学習
 - ・平和な未来をつくるために
私たちは何ができるのか発表
 - ・派遣日程等の最終確認



8月6日(水) 習志野市平和祈念式典(広島)

- 習志野市原爆死没者慰霊および平和祈念式典に参列

8月8日(金)～8月10日(日) 長崎市訪問

- 平和祈念式典
(長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典)に参列
- 青少年ピースフォーラムに参加
- 平和関連施設の見学

8月28日(木) 派遣後学習会

- 平和な未来をつくるために
私たちは何ができるのか発表
- 今後の取り組みについて



10月26日(日) 福祉ふれあいまつり

- 平和基金募金活動
- 長崎派遣報告発表

11月8日(土)・9日(日) 食とくらしの祭典

- 平和基金募金活動
- 長崎派遣パネル展示

3月5日(木) 解団式

事前学習会



－派遣への準備－

◎第1回事前学習会

派遣の概要を説明し、長崎について学ぶため「学習テーマ」を決めました。

◎第2回事前学習会

団員たちはそれぞれ調べたことを発表し、知識を深めました。

◎第3回事前学習会

平和な未来をつくるために私たちは何ができるのか話し合いました。

『抱負』

派遣に向けて、各自の思いを発表しました。

岡田 千砂子 団長

私が被爆者の会との関わりを持つようになる前、戦争、原爆投下、それらの事はどこか遠くの事、自分に関わりのない事、と漠然と想着いて、というより思いをいたす事もなかったというのが正直な話だった。でも、私が出会った被爆者の方達は、80年前実際に長崎で、広島で、心と体に受けた原爆被害、そしてそれからどうやって生きてきたか、を目の前で話して下さった。それは長崎で7万人が、広島で14万人が亡くなったという数字の話ではない。話している方は遠くにいるのではなく、目の前に今生きている。気が付くのが遅かった、と思った。もっと早く私自身の耳で聞くべきだったと悔やんだ。でも、遅いと言っている間に手遅れになってしまうかもしれない。私は出来る限り、被爆者の方のその口から話される言葉を心に留めなければならない。どんな気持ちで話して下さったか、何を伝えたかったかを受け取らなければならない。長崎に行って、そこに今も残っている傷跡から、私は何を感じ取ることが出来るだろう。全身で受け止めてきたいと思う。「ハチドリのひとしずく」かもしれないけれども、受け取る、伝える、それが今私に出来る事だと思う。そして叶うならばそれが、核兵器のない、戦争のない世界を望む声の大河になってほしいと願う。



中村 泰希 団員

私が今回、長崎での平和祈念式典に市の平和市民団の一員として参加しようと思ったのは、いくつかの強い問題意識がきっかけです。私自身の親は戦後に生まれた世代であり、私が教える中学生たちも、ほとんどが祖父母の代から「戦後世代」です。戦争の直接の記憶は、地域社会から急速に失われています。そのことを授業や日常の会話の中で痛感してきました。子どもたちは戦争を「過去の話」「教科書の中のこと」としてしか想像できない。その危うさを、教師である私自身が直視しなくてはいけないと感じました。



また、日々のニュースを見ていて、日本社会においてもウクライナ侵攻や中東の戦争、アフリカやアジアの内戦の報道がどんどん小さく、短く、そして遠いものになっていくことに強い危機感を抱きました。悲惨さへの共感や想像力は、関心を失ったときに失われます。私自身も、忙しさを理由に「見たくない現実」をスルーしてきた瞬間がありました。そうした自分の態度を省みたとき、子どもたちに「平和の大切さを考えよう」と言う資格があるのか、と自問せざるを得ませんでした。

さらに、近年、映画をきっかけとした原爆を茶化すような不適切なミームが流行したこと、そして現役大統領の不用意な発言に対して、国際的に原爆投下の正当化が根強いことを改めて突きつけられました。私自身は、そのことに強いショックを受けましたが、同時に「本当に自分は原爆投下や被害の現実を知っているのか」「そのショックを、当事者の痛みと比べて軽々しく言っていないか」と考えました。ショックを受けたと言うなら、まずは自分が知らなくてはならない。現地を訪れ、証言を聴き、歴史を学び、自分の目で確かめる責任があると感じました。

今回の平和市民団参加は、そのための一歩です。被爆地での式典に参列し、学び、問い続け、伝える覚悟を持ちたい。そして帰ってきた後、子どもたちに「戦争は遠い話ではない」「過去の悲劇は私たちの未来を守る教訓である」ということを、自分の言葉で伝えられる教師になりたいです。平和教育は、知識を教えるだけでなく、想像し、感じ、問い続ける力を育むことだと信じています。その責任を引き受ける決意を胸に、長崎へ向かいます。

沖山 隼人 団員

この度、終戦80年という節目の年に習志野市平和市民代表団として参加できることを嬉しく思うと同時に、大きな責任を感じています。私は小さいころから地理や歴史が好きで、インターネットや本で原爆について知る機会がありました。しかし、それは文章や写真といった実際に感じ取りにくい資料も多かった上、よく話す祖母も戦後に生まれたので、戦争や原爆の話聞いてもピンと来ないこともありました。中学生になって、先々代の平和市民代表団の先輩による派遣報告を学校で聞いた時、自分の中の意識がガラリと変わったことを覚えています。先輩は、見たこと、聞いたことを写真や言葉を使い一生懸命伝えていて、まるで現地のガイドの方に教えられているような感じで、その場の空気が重くなったことを今でもハッキリと思い返せます。世界では、ウクライナや中東のように国同士が戦争したり、内戦をしたりする地域が未だにあります。私たちの暮らす日本も80年前まで残虐な殺し合いが行われていましたが、当時を知る人も少なくなり、この戦争が「ただの歴史の1ページ」と化してしまう日も遠くはありません。戦争に関する話題を極端に忌避したり、戦争を肯定してしまうような人も少なくない日本では、当時の光景や体験を伝えることによって、全ての人が平等に戦争について知り、誤った認識を増やさないことが重要だと考えます。私はこの考えを基に、学校の生徒や市民に戦争の記憶を受け継いでいきたいと思っています。



大澤 咲 団員

世界には、様々な歴史があります。その歴史の中から1945年8月9日、長崎に原子爆弾が投下されたことが教科書に載っていたり、ニュースで取り上げられたりしているのは、「原子爆弾の残酷さや、現地の悲惨さを後世にも知ってもらい、受け継いでほしい。忘れないでほしい。」という思いが込められているのではないかと私は考えます。今の世代は、原子爆弾の恐ろしさを知らない人が多いです。「長崎に投下された原子爆弾について詳しく説明できますか。」と聞かれたら、自信を持って領ける人はいないでしょう。当事者の方も戦争の恐ろしさを伝えてくれる方も少ない中で、実際に現地に行って学ぶことができる。それは、私が生きていくうえでとても大きな財産になると思いました。戦後生まれで戦争の怖さを知らない私たちだからこそ、学ぶことがたくさんあります。学んで終わりにするのではなく、戦争について少しでも理解してもらうために、学んだことを周囲に伝えたり、二度と戦争が起きないようにするには何をすることが必要なのかを考えたりする。それが、私たちの輝く未来を守るための近道であると思います。習志野市平和市民代表団の一員として、世界が平和であり続けるために、私たちがすべきことを考え、責任をもって現地に足を運びたいと思います。



徳留 大希 団員

私が今回の派遣に向けてがんばりたいことは2つあります。

1つめは「原爆について詳しく知る」ことです。まだよく知らない原爆や被爆地についての理解を深め、第三中学校に学んだことを持ち帰り、多くの生徒に原爆の怖さを知ってもらいたいです。

2つめは「代表としての自覚を持つ」ことです。習志野市の代表の1人として、第三中学校の代表として学びのある3日間にしていきたいです。以上のことをしっかり意識して、平和について詳しく学んでいきたいです。



大塚 湧斗 団員

今回、平和市民代表団として長崎派遣に参加できることを大変うれしく思います。私が、今回の平和学習に参加したいと思った理由は、中学校での歴史の授業での出来事にあります。私はつい最近まで戦争ということをも身近に意識することなく生活してきました。小学校でも歴史の授業で2度の世界大戦について学びましたが、それは断片的なもので、自分の中で平和とは何かを考えることはなかったです。そしてある日の授業で、社会の授業の一環として戦時中の日本のドキュメンタリーとアニメ映画を鑑賞しました。私はその時、その場にいたわけではないのになんだか悲しく苦しい気持ちになりました。そして、私は今の平和な日本に住んで生活してきたことにありがたみを感じました。そこから、私は主に第二次世界大戦について調べ始めました。その経緯は様々な国の思惑が混合しておこったもので、人間とはここまで非人道的な行為ができるのかと驚愕しました。そして、その戦争に日本も関わっていたことに悲しくなりました。私は、今回の学習を通じてより平和に関する考えを深めたいと考えています。実戦で最後に使われた原子爆弾が落とされた長崎を訪れ、今の日本を作った先人に感謝するとともに、恒久の世界平和を実現できるように、日本国民として恥じない行動ができるようになっていきたいと思っています。



相川 和来 団員

今回、生徒会長として長崎派遣団に参加することになり、この貴重な体験を肌で感じることができることに嬉しく思います。

私の母は、沖縄県の伊江島出身です。伊江島は沖縄戦の縮図と言われるぐらいの激戦地だったそうで、幼い頃から戦争の話を聞いてきました。また、曾祖母は、東京大空襲の経験者で、1945年3月末明、東京市街地は破壊的な被害を受け燃え盛る炎の中、間一髪で命を繋げました。沖縄戦の話、曾祖母の東京大空襲の体験談は、私にとって戦争の悲惨さを身近に感じさせました。このような話を通して、私は戦争が人々に与える深い傷、そして平和の尊さを考えさせられました。



長崎を訪れることは、単に歴史的な場所を巡るだけでなく、曾祖母の経験と重ね合わせ、戦争と向き合うことだと考えました。原爆資料館などを訪れることで、平和への願いを新たにしています。そして、それを未来へと繋いでいく伝承者となり、沢山の鶴を折ってくれた第5中生の皆さんにも伝えていきます。

千葉 光葵 団員

今回、習志野市平和市民代表団の一員として、長崎派遣に参加する機会をいただけてとてもありがたく感じています。私は戦争についてあまり興味がなく、自分から調べたりしたことはありませんでした。ですが、普段経験することのできない貴重な機会をいただけたので、事前学習や長崎派遣で多くのことを学び、より多くの人に発信できればと思います。今も世界では戦争をしている国があり、苦しんでいる人が多くいます。そこで、日本が戦争で原爆を落とされ多くの被害を受けた国として、世界平和のために、世界へ戦争の大変さを伝えていくべきだと思います。自分たちが直接戦争を止めることはできませんが、平和のための一歩として、今回の長崎派遣でより多くのことを学べるようにしたいです。



原 花蓮 団員

このたび、令和7年度習志野市平和市民代表団の一員として、長崎を訪問する機会をいただき、大変光栄に思います。長崎は、原子爆弾の投下によって多くの命が失われた地であり、今もなお平和の大切さを世界に訴え続けている場所です。私は今回の訪問を通して、戦争の悲惨さや被爆者の方々の体験、そして平和を築くために人々が積み重ねてきた努力について、実際に現地で学び、深く心に刻みたいと考えています。

また、私たち若い世代は戦争を直接知ることができませんが、だからこそ、過去を学び、伝えていく責任があると思います。現地で感じたこと、聞いたこと、考えたことを、習志野市に帰ってから多くの人に伝え、平和への思いを共有していきたいです。そして、この経験をきっかけに、日々の生活の中でも平和について考え続け、行動につなげていける自分でありたいと思います。この貴重な機会に感謝し、一人の市民として、また未来を担う若者として、平和の大切さを学び、考え、伝える姿勢を忘れずに臨んでまいります。



織戸 紗代 団員

私はこの長崎派遣を通して原爆の恐ろしさ、平和はあたりまえでないこととともに、学年の壁を超えた仲間たちと学ぶことを経験したいと思っています。今回の長崎派遣団の学生の中では、私は高校3年生であり、最年長です。年齢でいえば中学3年生のみなさんとは3つ離れている先輩に当たるとは思いますが、ぜひ年などは気にせず同じ団員として接していただければと思っています。

自己紹介の際もお話させてもらいましたが、高校2年生の修学旅行で広島へ行きました。私は広島の中でも平和記念公園と平和記念資料館、そして原爆ドームなどを見ました。平和記念公園には、中央に「平和の灯」が燃えていて、この灯は核兵器がこの地球上から姿を消す日まで燃やし続けよう、という思いがこめられて、雨の日も風の日も燃え続けているそうです。この灯のまわりは水で囲まれており、その真ん中に手を合わせた形を象徴したオブジェがあり、水を求めつづけていた犠牲者を慰めて、世界の恒久平和を願っている。私が聞いた話の中で一番印象に残っているものです。すべての要素が「平和」、ただそれだけを一心に願い続けているのを肌で感じました。学校の授業や教科書では「戦争はいけないこと」「平和は大切」だと習うし、書いてあります。テストではそのまま解答すれば丸がもらえます。では、なぜ戦争はいけないことで、平和は大切なのか、これについて丸をもらって満足するのではなく、より深く考えて自分たちの中で読みといて、理解して知識として得ることももちろん大切ですが、感覚的なものではありませんが、「心」で理解することが重要だと、私は考えます。私は戦争や平和について、みなさんと一緒に「心」で学んで理解したいです。



大志民 葵 団員

今回、習志野市平和市民代表団の一員として、長崎派遣に参加できることを大変嬉しく思います。私は以前、家族と共に広島に行ったことがあります。そこで原爆ドームを見たとき、とても悲しい気持ちになりました。当時の私は戦争の歴史を知らなかったが、その悲惨な姿に一時期圧倒されていました。数年後、戦争の歴史を勉強した時、一つの爆弾がこれほどの被害を与えてしまうんだと感じました。死者は多く、放射線による後遺症が残る人も、それにより死ぬ人も多いいことを知り、もう二度とそのような悲惨なことは起きてほしくないと思いました。今回は広島次に原子爆弾が落とされた長崎へ行きます。そこでも同じように悲しい思いをした人や苦しい思いをした人がいると思うと、胸が締めつけられます。



私たちは戦争のない平和な時代に生まれ、育ちました。私たちは戦争について詳しく知りません。そんな私たちがこの世界にはたくさんいます。この悲惨なことを知らない人だっけきつといます。それは良いことなのか、と考えたことがあります。平和な世界に生きて、苦しいこと悲しいことを知らないで良いのかと。私は良くないと思います。まず、平和なこの世界は戦争があり、原爆が落とされたからこそ成り立っています。知らないままでは、また同じ運命をたどることだってありえます。私はそれをなくしたいです。もう二度と、戦争をしないためにも、このように悲しみ、苦しむ人を減らすためにも、まずは身近な人に伝えていきたいです。この派遣を通し、もう一度戦争について考え、今私ができることを全力でしていきたいです。

『被爆者の声』を聞く

インターネット上で公開されている『被爆者の声』より、各自で被爆証言映像を視聴し、被爆者の方の被爆証言内容と感想を事前学習会で発表しました。

岡田 千砂子 団長

証言者 陣野 とみ子 さん (被爆時19歳)

証言内容

職場の地下で梨を食べようとした時「ボンッ」ときた。髪はちりぢり、顔は灰だらけ、誰も助けに来ず、外に出たら事務所が崩れ、壁から手が伸びて助けてと言われるが助けられなかった。一緒に逃げた先生は二か月後に亡くなった。家には両親、祖父母、兄弟がいて家は崩壊、母と祖父はガラスの破片でけがをしていた。翌日、叔母を探しに行き家族と思われる遺体を火葬したがその後本人が帰ってきた。疎開先への道では臭いが体に染みついた。母は、私たちが嫁に行けなくなると手帳を申請しなかった。核兵器なんてとんでもないと思う。

感想

習志野市に住んでいた青木茂さんが当時働いていた会社と同じ三菱兵器の、更に1km近く爆心地寄りの工場地下で被爆された陣野さん。地下にいれば助かっていたかは分からないと言っていた青木さんの言葉が重なる。助けを求める手に応えられなかったことを悔いているのは、他の被爆者の方も共通に抱える苦しみで、疎開先に向かう途中の地獄絵図、人や馬の死体の臭いが体に染みついてしまった事も同様、生涯忘れられなかったのだろうと思う。助かったと思っていた先生、家族もその後亡くなり、核兵器の恐ろしさはそこにある。お母様が、娘達の将来を心配し、被爆手帳の申請をしなかった。当時は差別を恐れ、被爆した事を周囲には隠しながら生きてきた陣野さん。原爆はその時だけでなく一生にわたって被害を与え続ける、その面でも決して使ってはいけない兵器だという事が、現在はかえって最大の脅しになってしまっている。核兵器だけではなく、兵器の先進化自体がばかっているのではないか。それでも現実には戦争がなくなる。戦争がなくなると兵器の開発は一層進む。陣野さんが最後に「戦争というものはどうしてするんでしょうか」と言っていた。心から同意する。それでも、今ではあり得ない過去の習慣がまるっきり変わってしまったように、核兵器なんてあり得ない！と言える将来が、これからを生きる世代に訪れるようにと願っている。

証言者 吉田 勝二 さん (被爆時13歳)

証言内容

当時13歳だった吉田勝二さんは、空襲警報解除後、防空壕から出て友人7人と歩いて帰宅中に被爆。腕の皮膚が溶け落ちたが、直後は痛みを感じなかった。母たちと再会后、死体が積み重なる中を避難。喉の渇きに苦しんだが、軍事教練の教えに従い、水を我慢。しかしついに耐えられず飲水し、そのまま4か月意識を失った。結果的に水を飲んだことは命を救った。薄くなった皮膚はリハビリのたびに裂け、手を握れるまで13年かかり、顔の右半分は皮膚移植でようやく回復した。一緒にいた友人は全員死亡した。吉田さんは、「戦争や喧嘩はいけない。争いは当事者だけにとどまらず拡大し、最終的に国家間の戦争に至る。自分と同じ傷を誰にも負わせたくない」と強く訴えている。

感想

吉田勝二さんの被爆体験を聞いて、改めて原爆被害の深刻さや過酷さを感じました。腕の皮膚が溶け落ちてすぐには痛みを感じないことや、後になって強烈な渇きや痛みが襲ってきたという描写に、生々しい現実を突きつけられました。また、軍事教練で教えられた「水を飲んではいけない」という教えを守り続けたものの、最後には水を飲んだことが結果的に命を救ったというエピソードは、戦争という極限状況において何が正解かなど、簡単には判断できないことを示しているように感じました。

吉田さんの「喧嘩や争いは連鎖し、国家間の戦争へとつながる」というメッセージは、シンプルながら説得力がありました。日頃ニュースで目にするウクライナや中東の紛争も、実際には無数の個人の苦しみ積み重なっているということ、私自身も忘れてしまっていたと気づかされました。

私が教える子どもたちは、戦争を実体験として知る世代からどんどん離れていきます。だからこそ、吉田さんの証言のような「具体的な体験」を伝えることが、自分の役割だと改めて思いました。今回の長崎訪問を終えたのちには、今以上に自分自身が平和について考え続け、それを授業を通じて生徒たちに伝えていく必要がある、という責任を再確認しました。

沖山 隼人 団員

証言者 青木 茂 さん (被爆時20歳)

証言内容

被爆時は、長崎市住吉町のトンネル工場内にいた。爆風が両方向より吹き、がれきに埋もれながらはうようにして出た。その先に見える農家の人が立ったまま燃えていて、後ろの方から女学生が工場めがけて避難してきたが、その光景は異様なものだった。彼らは髪の毛が横に縦にも広がっていた。その後、青木さんに子供が産まれたが、少し傷を負うだけで化膿する子供だった。これは白血球の量が少ないことを意味し、後遺症は孫にも遺伝している。

感想

青木さんの見た凄惨な光景は、平和な現代を生きる私たちにとって想像し難いものだったのでしょうか。ビデオでは、状況の細かな説明に加え、イラストに描かれた光景もありました。それらは、見るたびに心がひどく痛めつけられ、それと同時に当時の光景を生々しく後世に伝える資料なので守らなくてはならないと感じました。青木さんはその場では幸い無事だったものの、立ったまま絶命して燃える農家の人、髪の毛があらゆる方向へと広がる学生、皮が焼けただれる人々などこの世のものとは思えない光景を見てどのように感じたのでしょうか。そして、原爆の放射線の影響が、自分のみならず、子や孫にも遺伝することを知ったときは、どれだけ辛い気持ちだったのか、想像が難しいです。私は、被爆された方の証言も聞いて、核爆弾だけでなく、戦争による悲劇はこの世からすぐ消し去るべきだと、改めて感じました。

大澤 咲 団員

証言者 今村 和子 さん (被爆時17歳)

証言内容

頬が焼け付くような熱さ。「大きい防空壕に逃げた方がよい」と言われて逃げる。食べるものもなく、父の消息も分からず防空壕から出かけると、人間も馬も目が飛び出ている状態。人間の山で川は真っ黒。酷いものだった。家の町、工場も真っ黒。既に亡くなっているお母さんが子供に覆い被さって守っていた。当時の道具で遺体を集めて焼いていた。救護班に入ったが、薬がない、包帯もないので、傷ついた腕を浴衣の切れ端で腕を巻いていたが、消毒することが出来ずに蛆が沸いていた。火脹れで家族の顔がわからず、みんなに「あなたは家族じゃないですか」と聞いていた。

感想

私がこのビデオを視聴した理由は、「生きている子供に覆い被さる母親の死体」という題名で、当時の状況を想像できなかつたからです。町を焼き、たくさんの人の命を奪った原爆の恐ろしさを改めて感じる事ができたと同時に、戦争を乗り越えた先祖が繋いでくれた命を無駄にしてはいけないと強く思いました。証言を聞くだけでも心が痛いのに、実際に戦争を経験した当事者の方たちはどれほどつらかつたのでしょうか。原爆について知っていくうちに、平和主義を掲げている意味を理解出来ました。そして、2度と同じことが起きないようにするために、私たちが戦争から目を背けるわけにはいきません。80年前の日本で何があつたのか、学んだことを自分の子孫や周りの人たちに共有して、1人1人が今後日本の平和を守ってくために何をすべきなのか考えていくべきだと思いました。さらに、今も兵器の開発がされていることを考えると、唯一の被爆国である日本の被爆者の声や想いを、もっともっと世界に届けることが必要だと思いました。

徳留 大希 団員

証言者 前川 巖 さん (被爆時15歳)

証言内容

警報を恐れた自分だけ爆撃をよけて、兄は助かったものの、父や教会はなくなってしまった。

感想

私が証言ビデオを視聴して思ったことは、「辛い過去が変わることはない」ということです。前川巖さんはとても詳しく当時の状況を説明していました。また、ビデオの中でずっと暗い声で話していました。ほかの方の証言ビデオも視聴してみましたが、すべての人が暗い声でした。これほど多くの方が暗い声で、さらに何十年も前のことを詳しく覚えている。原爆は本当に、本当に恐ろしいものだと思います。

大塚 湧斗 団員

証言者 小林 幸子 さん (被爆時7歳)

証言内容

原爆が投下される直前まで友達と遊んでいた。母はB-29の音を聞いて自分が狙われていると思って伏せた。父から「空襲警報だから防空壕に入れ」と言われて直撃することは避けられたが、弟は背中にやけどを負ってそのあと防空壕で亡くなってしまった。母はその時やけどが背半身だったので弟のケガに気づくことはできなかった。母は、他の家の子の面倒を見ていたため、わが子を看られなかったことを悔いていた。遊んでいた友人はケガを負ったりケロイドがあったりして数か月後には白血病で亡くなってしまった。家は傾いて馬小屋は吹き飛ばされていて馬の死体があった。隣に住んでいたお姉さんは丸焦げの状態で担架で運ばれていっているところを見た。母はいつも生き残れたことに感謝と言っていたが、神父さんから原爆は人間がやったことだからそれで生き残れたことは神への感謝じゃないだろうといわれたことがあったそうだ。

感想

私がこのビデオを見た理由は、タイトルになっていた“戦争は人間の仕業ですよ”という言葉を見て、はっとしたからだ。今の私にとって、戦争はどこか遠いところで起こっているような気持ちだったが、同じ生物である人間が引き起こしているということに気づいた。そして、小林さんのすべての証言の節々に重みを感じた。証言の最後に放った“戦争は人間の仕業ですよ”という言葉聞いて、小林さんが経験したことがすべて詰まっていると感じた。周りの普段から過ごしてきた友達・人々が次々に倒れ皮膚はただれ、誰もが絶望しているそんな状況に自分があつたら、私はどうなってしまうのだろうかと恐くなった。今2025年は戦後から80年が経過し、被爆者の方々のお話を聞けることも減ってきている。我々は今、平和な戦争をしない国で過ごすことができているが、仕掛けられないということではない。三回目の世界大戦が起きたことはないが、中東地域やウクライナ・ロシアの戦争、朝鮮半島でも終戦ではなく休戦の状態が続いている。80年前に日本に落とされた核兵器の開発は進み続けている。私たちは唯一の被爆国の国民としてできることは何なのか考えなければならない。

相川 和来 団員

証言者 関 敦子 さん (被爆時7歳)

証言内容

裏のお子さんと遊んでいたところ、飛行機の音が変だということで防空壕へ2人で走っていったそうです。料理をしていてそのまま出てきてしまったお母さんが火を消しに戻り、それで遅れてきたお母さんは入口前で火傷をしました。その時、真っ暗な気配の中を異様な格好でお母さんは帰ってきたそうです。そして、火傷をしたにも関わらず、敦子さんの腕を引っ張って逃げたそうです。そのときの情景として「ガラスや木で道はいっぱいだった」と、証言しています。

感想

戦争の悲惨さを物語っている「地面を見ることはなかった」「ガラスや木が道いっぱいだった」などという証言から、戦争の恐ろしさが伝わってきました。この状況の中、裸足の人や下駄の人などが走っていたかと思うと、恐ろしく、残酷だと思いました。このような状況を私達は体験したことはありませんが、曾祖母も同じようなことがあったと思うと身近に感じ、二度と同じ状況を作ってはならないと強く思いました。

千葉 光葵 団員

証言者 浦田 千鶴子 さん (被爆時19歳)

証言内容

当時19歳で玉木高等実践女子校の教諭だった浦田千鶴子さん。原爆が落ちた時日直当番で教室にいた浦田さんが母親を探そうと自宅へ帰ろうとすると、自宅のあった岡町が火の海になっていた。その後も救護所などを探したが、母がなくなっていた。戦争から長崎の人は医療費がタダでよかねと言われるようになった。

感想

僕は、今まであまり原爆のことについて興味が無くしなかったけれど、浦田さんの証言を聞いて原爆はとても恐いものなのだと感じました。原爆から逃れた浦田さんも爆撃によって母親を失ってしまい大変なのに、周りの人から「長崎の人は医療費がタダでよかね」と言われ、原爆が落とされた事の大変さを理解してもらえず50年以上も生きていくのはとてもつらく大変だと思いました。浦田さんの証言から、原爆による差別や戦争が、この先の世界で二度と起きてはいけないものだ実感しました。

証言者 関 敦子 さん (被爆時7歳)

証言内容

家で遊んでいたとき、空を飛ぶ飛行機の様子に異変を感じ、道一本離れた場所にある防空壕へ避難した。母はかまどの火を消すために遅れて向かい、防空壕の入口で火傷を負った。やがて防空壕の蓋から火が吹き出し、母に手を引かれて大通りのほうへ逃げるようになった。地面にはガラスや木材が散乱し、母の着ていたモンペはゴムの部分だけが焼け残り、それ以外はひどく焼け焦げていた。靴が脱げてしまい、途中で何かを拾って履いたが、水ぶくれが破れて皮がめくれるほどの火傷を負っていた。避難中、飛行機が何度も飛んできたため、物陰に隠れながら進んだ。ガスタンクが爆発し、火が美しく見えたことに「こんな時にそんなことを思っただけじゃない」と感じたことも記憶に残っている。後ろを振り返ると、姉と見られる女の子が弟の手を引いて後を追ってきていたが、その少女の片目が潰れていた光景は今も忘れられない。その後、崖のようなところを降りたが、それ以降、その姉弟の行方はわからなかった。仮設の掘っ立て小屋でしばらく避難生活を送り、やがて親戚のいる平林地区へ、叔母が迎えに来てくれて避難することができた。

感想

この体験談をみて、私は戦争や原爆が人々に与えた恐ろしさと深い傷を、あらためて実感しました。家で遊んでいた何気ない日常が、空を飛ぶ飛行機の異変によって一変し、防空壕へと避難することになります。お母さんは、かまどの火を消すために遅れて到着し、入口で火傷を負ってしまいました。それでも必死に子どもを守ろうとする姿から、親の強さや愛情が強く伝わってきました。避難の途中、ガスタンクが爆発し、その火が「美しい」と思ってしまったという話に、私はとても複雑な気持ちになりました。普通ならあり得ない感情かもしれませんが、極限の状況で人はどんなことを感じるのか、想像もつかない現実があったことに気づかされました。また、逃げる途中で出会った、片目が潰れてしまった少女の姿や、その後行方の分からなくなった姉弟の話は、とても衝撃的でした。見たくなくても、忘れられないような光景が、たくさんの方の記憶に残っているのだと思います。このお話をきいて、戦争がどれほど多くの方の命と生活を壊し、人々の心に深い傷を残してきたのかを強く感じました。そして、今こうして平和な生活を送れていることが、どれだけありがたいことなのかを改めて思いました。私たちがこのような体験を語り継いでいくことで、二度と同じ悲劇が繰り返されないようにしたいです。戦争を知らない世代だからこそ、知ろうとする姿勢を持ち、平和の大切さを学び続けていく責任があると思いました。

証言者 田邊 俊三郎 さん (被爆時20歳)

証言内容

広島市内、吉島町中国塗料工場にて被爆。顔面にやけどをし、薬（亜鉛華・亜麻仁油）を作った。中学3年生、主任、俊三郎さん3人で部屋にいた。B29がおとした原爆から1.5km地点くらいにある工場は、屋根がふっとんだ。変電所以外は全部×。自身も胸から上を大やけどした。悲鳴をあげた。がれきの下にいた。手をつかんでも皮がむけた。ずるずるだった。保健室につれていこうにも、がれきがすこくて大変だった。人もまきこまれ、下敷きになっていた。工場には3,000人ほどいた。爆風で砂ぼこり、みんな真っ黒、真っ赤だった。

感想

2007年の12月ごろにしたインタビューだった。原爆が落とされた1945年の8月から約60年も経っているのにも関わらず、当時の自身が取った行動や周囲の様子を鮮明に覚えていて、それを言葉で説明できることにまずおどろいた。なぜそこまで鮮明に記憶されているのか。私は、原爆が落とされた日が強烈なインパクト、恐怖、緊張感、痛みなどを持っていたからだと考える。一種のトラウマに近いのではないだろうか。俊三郎さんは原爆が落ちたとき、自分の胸から上は原爆でやけどしてヒリヒリしていたと言っていた。きっと原爆ほどのやけどを私が負ったら、ヒリヒリなんて音では表しきれないほどの痛みだと思った。B29が落としていったんだろう、という言葉も私は少し恐怖というか、ゾツとした。普段から上空に爆撃機が飛んでいて、それがついに原爆を落としてゆく。現代では想像ができない光景だ。私のような戦争を知らない世代は、戦後に生きている幸せを感じると共に、戦争中の生活やそこで生きていた人々のことを他人事と考えわけるのではなく、昔を、過去を知り、更に今を生きられていることに感謝の気持ちを忘れてはいけないのだと思った。

大志民 葵 団員

証言者 立野 季子 さん (被爆時13歳)

証言内容

長崎市酒屋町にて被爆(爆心地より3km)。姉の変わりに防空壕を掘る手伝いをしている時に爆音がした。その後すぐに閃光が→その場で目と耳をふさぐ→その後熱風が→家族全員と再会できた。(おばさんに病院の防空壕に連れていってもらう)県庁に火がついた→そこにはいられない→皓台寺境内へ疎開→夜にうめき声→夜が明けると悲惨な状態で目をおおうほど。その後母の実家の三重へ疎開、被爆し手にいぼがたくさんでき、“鬼娘”と呼ばれていた。

感想

爆心地より3km離れた所でも、閃光と熱風を感じるくらい強力なエネルギーをもっているのだと改めて思った。やはり戦争があった時代は学校で爆破があったときの対策みたいなことをして身を守れるようにしていたんだなと思った。今ではそのようなことをしないから、今爆弾が落とされたとしたら、私たちは生きてないかもと思った。被爆者の方が、ちゃんと家族全員と再会できて、本当に良かったと思った。夜が明けると悲惨な状態であったところで、私がその場にいたら、目をおおうほどの状況に気絶してしまうかもしれないほど、いやそれ以上に怖い思いをすと思いゾっとしました。また、三重に疎開した時、被爆の影響で手にいぼができ、鬼娘と言われるところは、私ならたえられないと思いました。そうやって差別やいじめをするのは良くないと改めて思いました。

『学習レポート』

中学生・高校生の団員は各自でテーマを選択し、レポートの作成・発表を行いました。

長崎市に投下された原子爆弾について

習志野市立第一中学校 3年 沖山隼人

概要

終戦直前の 1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分に、アメリカ軍が長崎市に対し原子爆弾「ファットマン」を投下し、死者 7 万 4 千人、長崎市の建物のおよそ 36% が全焼または全半壊する大惨事となった。

経緯

第二次世界大戦中、連合国が原子爆弾を製造する計画、「マンハッタン計画」を成功させ、枢軸国に対し投下するかの議論になった。

当初は、京都、広島、横浜、小倉(現北九州市)を投下目標とし、長崎市は含まれていなかった。

その後、京都、横浜が投下目標から除外され、新潟、長崎が追加された。

1945 年 8 月 8 日、翌日の原爆投下候補地が第一目標に小倉、第二目標に長崎が選定された。

当日、小倉の天候不順等による理由で第二目標の長崎を目標に原爆が投下された。

投下による影響と被害

投下直後

長崎市浦上地区の工場の直上で炸裂した原子爆弾は、浦上地区付近一帯を壊滅させた。

山による遮蔽で市中心部にある官公庁は広島と異なり大きな被害は免れたが、

浦上天主堂に集っていた人々は即死、長崎医科大学の患者や職員も大勢犠牲となった。

投下数時間後

未知の新兵器による爆撃で役所や病院は大混乱に陥っており、適切な救護活動や消火活動等が行えたのは原爆投下から 3～6 時間後であり、その間に亡くなった被爆者は少なくない。

負傷者は県内の諫早、大村、川棚、早岐方面の医療施設に収容された。負傷者らは誰も履物を履いておらず、着衣はボロボロな凄惨な状況であった。

投下翌日以降

投下当日は無事のように思えた被爆者でも、翌日以降に放射線による重篤な被害を受けたり、後遺症を残したりするなど、原子爆弾ならではの被害が多く見られた。

血液中の白血球の量が少なくなったり、放射線によるがんが発生したりと、後遺症は今を生きる被爆者、そしてその子孫も苦しめている。

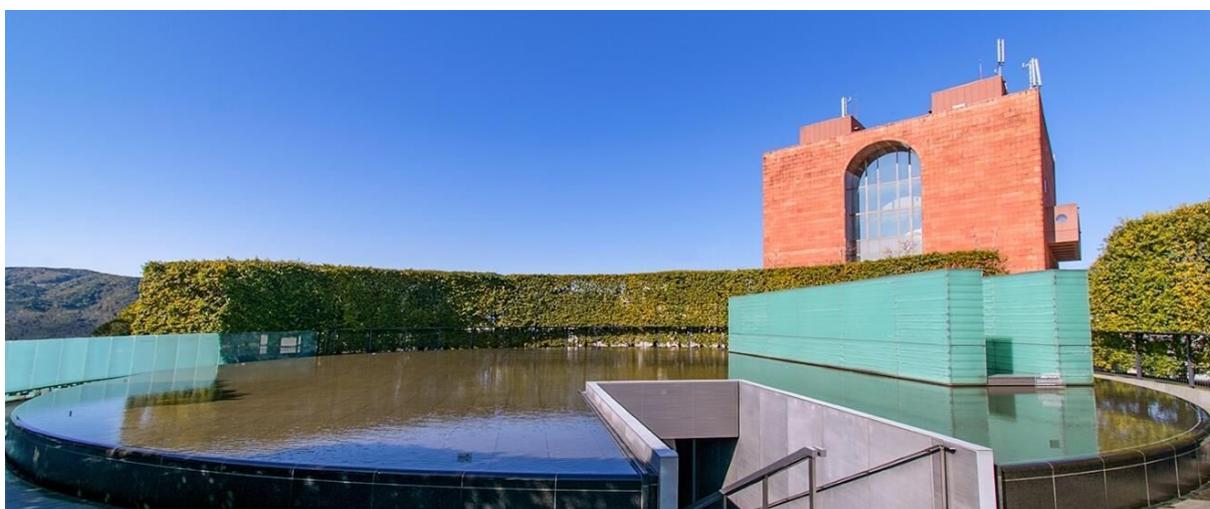
最後に

戦後 80 年となった今年、当時を知る人が少なくなっていく中、私たち次世代の人々はこの生々しい記憶をしっかりと受け継いでいく必要がある。

～国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館について～

【国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館とは】

原子爆弾により死亡した人々や、その後に亡くなった被爆者を追悼し、世界平和を願う施設。原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律第41条の規定に基づき、原子爆弾による死没者の尊い犠牲を銘記し、恒久の平和を祈念するための施設として、被爆地である広島とともに設置された祈念館である。死没者名簿と遺影の永久保存、手記・体験記、映像資料などの収集と公開、被爆医療や平和を中心とした国際協力に関する情報提供を主な目的としている。



【戦争の恐ろしさを来館者に伝える】

データベース化された原爆死没者の遺影や被爆者の体験記、証言映像などから、その姿やことばが検索・閲覧・視聴でき、来館者の皆さんも平和へのメッセージを記して登録し、将来に残すことが出来るようになっている。また、夜には光ファイバーによって1945年12月末までの推計原爆死没者数である約7万個の追悼のあかりが灯る。施設入口から水盤を反時計まわりに進む（原爆が投下された1945年に時を遡る）ことで、心を落ち着けて追悼の準備をしてもらうことを意図している。



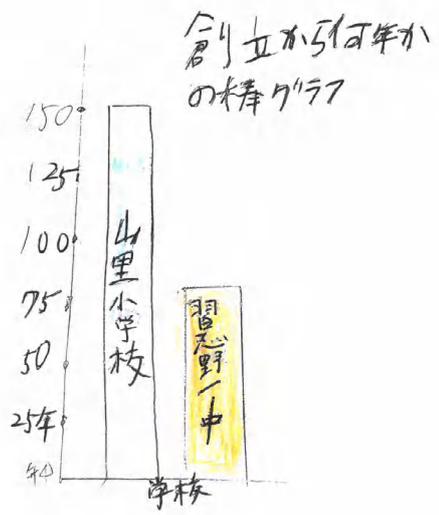
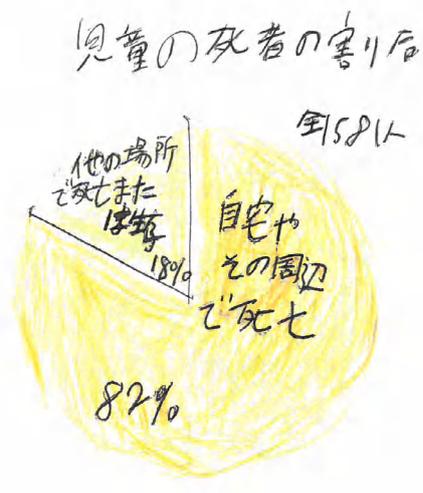
長崎市立山里小学校とは 第三中学校 徳留大弟



① 学校目標
 「やさしさと思いやりで、笑顔がこぼれる」
 ~言ひめ合ひ、肩かき合ひ、ステップアップの山里っ子~
 で、今年で151年組となる歴史ある学校。何度か名前を変えているが、平和活動に重点を置いた他の小学校に劣らぬ教育をしている。

② この小学校は、爆心地から700mしかなく、校舎の南側には被害を受けた(3階が抜け、1,2階が崩壊)児童にも被害が及んでおり、158人中、約1300人は自宅やその周辺で死亡したとされている。

③ 当時を語り継ぐために、「お子らの石」をはじめとしたたくさんの平和モニュメントがある。その中の一つ、「お子らの石」はお亡くなりになった児童、教員などの思いがこめられてできた石。毎日に授業を行っている今も、行事のたびに児童たちも祈りを捧げているそう。



浦上天主堂について

1. 浦上天主堂建設までの歴史

江戸時代で長きにわたって敷かれた鎖国体制によるキリスト教信者への弾圧がなくなった明治時代。その時代にキリスト教の信者の方々によって浦上天主堂の建設が計画されました。明治28年(1895)、フレノ神父の設計による建設が開始され、大正14年(1925)にレンガ造りのロマネスク様式という建築方式で東洋一とも称された大聖堂が完成しました。

2. 破壊

アメリカとの太平洋戦争末期、1945年8月9日。長崎に原子爆弾“ファットマン”が投下。これにより、長崎市は甚大な被害を受け、壊滅的な状態となりました。爆心地から500メートルに位置した浦上天主堂もその例外ではなく一部外壁を除くすべてが破壊され、ほぼ全壊状態になりました。この時、中にいた信者の方々は倒壊による瓦礫の下敷きと原爆の熱戦により亡くなってしまいました。

3. 再生と希望の象徴に

戦後、昭和34年(1959)に鉄筋コンクリートにより再建され、昭和55年(1980)レンガのタイルで改装され、復元されました。原爆の爆風に耐えた鐘が一日三回奏でられています。現在では、長崎市の観光名所となっています。



長崎市公式観光サイトより

1945年8月9日午前2時47分テニアン北飛行場を離陸したアメリカのB29爆撃機（ボックスカー号）は、小倉への投下をあきらめ長崎へ向かう。そして午前11時2分、B29から投下された原子爆弾（ファットマン）は松山町171番地の上空約500mで炸裂し、一瞬のうちに多くの尊い命を奪った。そして毎年8月9日、被爆地長崎市では原子爆弾投下による被爆者を追悼し、世界平和を祈念する「長崎平和祈念式典」が開催される。この式典は、単なる過去の悲劇を振り返るだけではなく、核兵器廃絶と恒久平和の実現に向けた誓いを新たに重要な場である。

式典当日は原爆投下午前11時2分に合わせて“長崎の鐘”や“サイレン”を鳴らし、式典会場のみならず、家庭、職場で原爆死没者の冥福と恒久平和の実現を祈り、1分間の黙祷を行った後、長崎市長による平和宣言と被爆者代表による平和への誓いを行うのが通例である。また、当日、長崎市各所では原爆死没者に対する慰霊と核兵器廃絶を訴える式典が行われている。当初、原爆の投下目標とされた北九州市小倉北区においても、同時並行で式典が行われ、長崎市長が毎年メッセージを寄せている。

長崎平和祈念式典の目的

- ① 犠牲者の追悼と慰霊。原爆犠牲者の魂の鎮魂、そしてその苦しみを深く記憶にとどめる。
- ② 被爆の実相の継承。原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さを次世代に語り継ぐ。
- ③ 核兵器廃絶の訴え。核兵器のない世界の実現に向けた国際社会への強いメッセージの発信。
- ④ 世界の平和と人類の幸福を心からの祈念。

今から16年前、当時の長崎市長田上さんは、「今、私たち人間の前には、二つの道があります。核兵器のない世界への道と64年前の広島と長崎の破壊を繰り返す滅亡の道です。」
「核兵器のない世界への道を共に歩んでいこう」
また、原爆で家族8人を失った奥村アヤコさん（当時72歳）は「平和への誓い」で「何十年たっても苦しみと悲しみを生み出す核兵器は地球上にいない」と…

令和の今を生きる私もそんな地球を創造していきます。

習志野市立第五中学校 相川 和来

長崎原爆資料館について

長崎原爆資料館は1945年8月9日に長崎市に投下された原子爆弾による被害を後世に伝え、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に寄与することを目的として長崎市に設立されました。



原爆資料館には、原爆資料や被爆者の手記などが掲示されています。

原爆資料館は被爆の実相や被爆者の遺品、写真、体験記などの展示を通じて過去の悲劇を繰り返さないために核兵器の恐ろしさを認識し平和の尊さを考えるために提供されました。

原爆資料館には平和に関する図書スペースやビデオスペースもあるので実際に行ってみて調べてみる事で世界の恒久の平和につながるのだと思いました。

平和公園について

【長崎市平和公園の歴史】

第二次世界大戦中の1945年8月9日にアメリカによって原子爆弾が投下されました。第二次世界大戦後、悲惨な戦争をもう二度と繰り返さないという誓いと、世界恒久平和への願いを込めてつくられました。

現在、平和公園は「願いのゾーン」「祈りのゾーン」「学びのゾーン」「スポーツのゾーン」「広場のゾーン」の5つより構成されていて、国内外から多くの人々が訪れています。

【願いのゾーン】

「平和の泉」とその奥に「平和祈念像」が見える願いのゾーンには、世界の国々より寄贈されたモニュメントなどがあり、平和への願いを捧げる場所として整備されています。毎年8月9日には平和祈念式典が行われ、平和祈念像前にある式典広場には数多くの方が訪れ、祈りを捧げています。

【学びのゾーン】

学びのゾーンには長崎原爆資料館があり、長崎市に投下された原爆についての資料や写真などが数多く展示されています。

【祈りのゾーン】

原爆が落下された祈りのゾーンには「原子爆弾落下中心地」があり、1968年に落下中心地標柱として黒御影石の碑が建立されました。周囲にはこの上空約500mで炸裂したことを表す同心円の広場となっています。

原爆落下中心地標柱前の原爆殉難者奉安箱には原爆死没者名簿をマイクロフィルム化したものが納められています。



山王神社について

「世界の恒久平和のこと、

わたしたちの唯一の願いです」

◇第二次世界大戦、昭和20年8月9日長崎に落ちた原爆によって鎮座地が爆心地から800m地点に位置していたため被爆した。残ったのは「二の鳥居」(片足鳥居・一本足鳥居)と「大楠」(被爆クスノキ)のみであった。



【二の鳥居】

○爆風に対して並行に立っていた一の鳥居と二の鳥居をのこしてほとんどの建物は全燃した。

○一の鳥居はほぼ原形のままだった。

○二の鳥居は笠石がねじ曲がって右半分を残して爆風により吹き飛ばされたものの、奇跡的に一本柱状態で残っている。

※一の鳥居は戦後の昭和37年に交通事故により倒壊してしまい、現在では見られない



【大楠】

原爆被災地の貴重な遺構として長崎市指定天然記念物になっている。神社の境内入口にそびえる2本の楠は樹齢500~600年でそれぞれ8mと6m。長崎市にある巨樹の一つだが、原爆の際に1/3以上が失われたため樹高が10m以下。被災によって一度は枯れ木同然になったが約二年後には奇跡的に再び新芽を芽吹き次第によみがえっていった。この生命力にあやかろうと多くの参拝者が足を運んでおり、直接大楠に触れるなどもできるそう。

【まとめ・感想】

原爆の威力はものすごいものだと言われたが、山王神社にある一本鳥居や被爆クスノキは現代を生きる私たちに原爆の恐ろしさや当時の惨状を物語るかのように見て手で触れることができる形で残っていることが分かった。もし爆風で何もかもなくなってしまっていたらこの過去の悲惨な出来事を知ること見ることでもできなかったのかと思うと、残ってくれていたことが本当に「奇跡」だと思うし、実際に見てみたいし知識として伝えていきたいと思った。

Q 役職は？

A 医学博士、随筆家
 「長崎の鐘」や「この子を残して」
 等の著書がある

Q 会った有名人は？

A. 1948年 ヘレン・ケラー
 1949年 昭和天皇
 1950年 大司教のフィリッポ・ベルグ

Q 原爆との関係は？

A. 被爆しながらも
 負傷者の求護活動に
 尽力し、その後、白血病と
 闘いながら原爆の影響
 に関する研究や平和活動
 を続けた

なが い たかし
永井隆



Q 家族構成は？

妻：緑 妻は被爆し
 焼けてはう
 長男：言成 一
 長女：郁子 長女と三女は
 次女：茅乃 大折
 三女：笹乃
 ※大折...若くして
 亡くなること

Q 宗教信者になった？

A. 厚い信仰心を持つ
 カトリック信徒

作品について
 長崎の鐘

→ 原爆の爆心地に近い
 長崎医科大学で被爆
 した時の状況と右側
 頭動脈切断の重症を
 負いながらも被爆者の
 救護活動に当たる様
 記録したもの

この子を残して
 → 自分の子供を残
 して死んでゆく悔し
 と、自分の専門に
 かける病氣と
 戦争で死ぬ悔しさを
 訴えたもの

とった賞とその賞について

1940年 功五級金鷄勲章
 → 日中戦争の時、日本軍にけ
 なく、中国人への医療にも「従事」
 1949年 医学博士号
 → 「尿石の微細構造」

まとめ
 被爆した時に重症を
 負い、その後白血病な
 と闘いながらも人のため
 に動いた人物。
 自分の命よりも他人の命、
 敵味方関係なく手
 のはし助けたい心
 優しい人物である。

写真で綴る長崎訪問



6:10 京成津田沼駅発

10:05 長崎空港着



12:40 昼食

14:00 青少年ピースフォーラムに参加(詳細は42ページをご覧ください)

●【開会行事】



◎青少年ピースフォーラム

全国の平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さについて学び、交流を深めることを目的とした参加型平和学習会です。長崎青少年ピースボランティアが司会進行をしたり、被爆建造物等の案内をしています。

●【フィールドワーク（長崎大学医学部、山王神社）】



◎長崎大学医学部

旧長崎医科大学として1945年8月9日の長崎原爆で大きな被害を受けた被爆地の中枢であり、いままキャンパス内外に被爆遺構・展示・研究拠点が残るため、「平和関連施設」として非常に重要な場所です。医学の立場から、被爆の実相と核兵器の非人道性を伝える役割を担っています。



◎山王神社

原爆で被爆しながら残った「被爆クスノキ」と「二の鳥居（片足鳥居／一本柱鳥居）」がある、平和を伝える象徴的な場所です。被爆クスノキは爆心地近くで熱線・爆風を受けて枯死寸前となりつつ、のちに芽吹いて復活し「もの言わぬ語り部」とされています。二の鳥居は爆風で片側の柱が折れ、片足のまま立ち続ける姿が原爆の威力を今に伝えます。

●【平和の灯 キャンドル絵付け】



◎平和の灯 キャンドル絵付け

白いキャンドルに、平和への願いを込めて絵やメッセージを描く参加型プログラムです。描いたキャンドルは、毎年開催される「平和の灯」当日に会場で点灯され、一人ひとりの思いを通して追悼と平和へのメッセージを形にします。

19:10 夕飯

21:10 宿舎

8:30 宿舎発

9:50 平和祈念式典会場着、会場にてインタビュー活動
(詳細は48ページをご覧ください。)

10:45 平和祈念式典(長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典)開式



12:15 昼食

14:00 青少年ピースフォーラム【意見交換】
(詳細は42ページをご覧ください。)



16:35

長崎原爆資料館 見学





◎長崎原爆資料館
被爆前の長崎の暮らしから、投下直後の被害の広がりまでを時系列で学べます。館内には、焼け焦げた遺品などの被爆資料、写真、証言映像・音声などが展示されています。放射線の影響や、救護・復興の歩みについても扱い、被害が長期に及ぶことを伝えます。

18:40

夕食

19:40

グラバー園 見学



21:30

宿舎

8:15 宿舎発

8:55 爆心地公園にて千羽鶴献納



9:00 市内フィールドワーク (ボランティアガイドによる案内)

ボランティアガイドの柴田さんによる説明を受けながら、平和記念公園内を見学しました。

【見学コース】

原爆落下中心地→平和公園→如己堂→浦上天主堂

●【原爆落下中心地】



◎原爆落下中心地

1945年8月9日に投下された原子爆弾が上空で炸裂した直下にあたる場所です。地点は長崎市の松山町付近で、現在は「長崎原爆落下中心地公園」として整備されています。公園内には、爆心地を示す黒御影石の標柱などがあり、被害の起点を具体的に示しています。被害が起きた場所を「地理的に」理解できます。

●【平和公園】



◎平和公園

悲惨な戦争を二度と繰り返さないという誓いと、世界平和への願いを込めて作られた公園です。園内には、水を求めてさまよった少女の手記が刻まれた「平和の泉」や、世界各国から寄贈されたモニュメントが点在しています。毎年8月9日には、この場所で長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が厳粛に執り行われます。

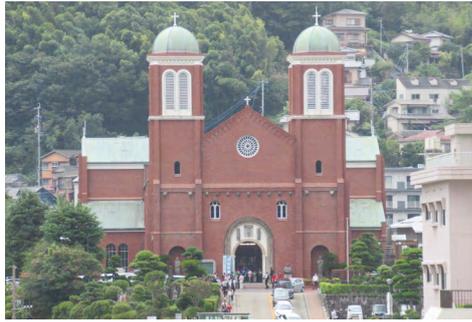
●【如己堂】



◎如己堂

被爆し白血病と闘った永井隆博士が、晩年を過ごしたわずか2畳一間の病室兼書斎です。名前は、聖書の言葉「己の如く隣人を愛せよ（如己愛人）」に由来し、博士の愛と平和への精神を表しています。戦後の厳しい状況下、浦上の人々やカトリック信者の協力によって1948年に建てられました。博士はこの狭い部屋で寝起きし、『長崎の鐘』や『この子を残して』など、平和を訴える数々の名著を執筆しました。現在は長崎市永井隆記念館の敷地内に保存されており、当時のままの姿を見学することができます。

● 【浦上天主堂】

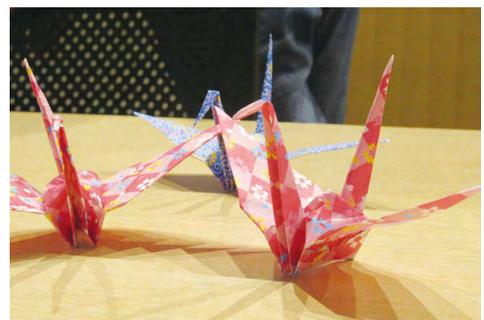


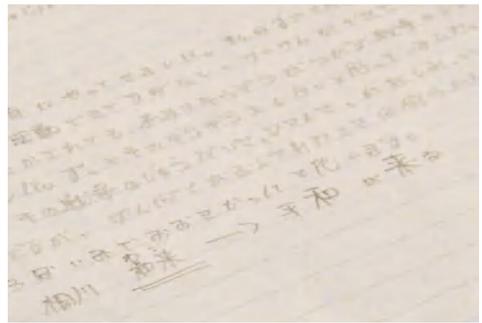
◎浦上天主堂

かつては「東洋一」の壮大さを誇りましたが、1945年の原爆投下により爆心地の至近距離で無残に倒壊しました。現在の建物は1959年に再建されたもので、赤レンガ造りの美しい外観を取り戻し、街のシンボルとなっています。敷地内には、崩れ落ちた鐘楼や、被爆した石像などの遺構が点在し、当時の衝撃を今に伝えています。

11:10

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 見学





◎国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

国が設置した原爆死没者を追悼し永遠の平和を祈念するための施設です。地下の追悼空間には12本のガラスの柱が立ち並び、死没者名簿が奉安され、静寂の中で祈りを捧げることができます。館内では亡くなられた方の遺影や体験記を検索・閲覧でき、被爆の実相を個人の記録から深く知ることができます。原爆資料館に隣接しており、資料館での「学び」の後、静かに「祈り」を捧げる場所として設計されています。

12:40

昼食

18:00

長崎空港

21:00

京成津田沼駅着

青少年ピースフォーラムに参加しました

毎年8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と地元長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学んでいます。

このフォーラムは、8月8日・9日の2日間にわたって開催され、長崎の青少年ピースボランティアが参加型平和学習を企画・進行し、被爆建造物等を案内するなど、青少年がつくる青少年のためのイベントです。

1日目は屋内での参加型平和学習や屋外でのフィールドワーク等を行い、2日目には学生同士でじっくり意見交換をする時間を設け、交流を深めています。

【内容】

- ・三瀬清一郎さんによる被爆体験講話
(詳細は44ページをご覧ください。)
- ・フィールドワーク
- ・平和学習(意見交換)
「どのような“違い”があるか」
「その“違い”によって何が起こるのか」
「起こる良いこと・悪いこと」

意見交換では、様々な地域の生徒・学生が班ごとに分かれ、テーマに沿ってディスカッションを行いました。

